

令和2年4月6日

## 京口門だより NO. 78

世の中は感染症の脅威と自粛生活で、仕事のうえでも苦渋をせまられている状態です。とても花見という雰囲気にはなりません、桜だけは薄桃色の花をこれぞとばかり咲かせています。ひとりで静かに桜に見入るのもまた一興です。「花騒心寂(しずか)を花となしにけり」(松根東洋城)

新型コロナウイルス感染症のことは新聞やテレビのメディアでも連日情報が流されていますが、最近の若い人は新聞を読んだり、テレビも見ることがないといいます。インターネットなどで自分の関心のあることだけに注目しているという話もききます。自分や自分の身近な人たちだけに関心があって、社会全体や公という面には興味がないように見受けられます。困ったことです。京大iPS研究所の山中教授は外国の状況をよくごぞんじなのか、たいへん危機感をもって注意を呼び起こしておられました。専門家の人たちの警告にはしっかりと耳を傾けるべきでしょう。この感染症に対して確実な治療法がいまだに見つかっておらず、試行錯誤をしながら急いで治療薬を検討していますが、ワクチンの作製には時間がかかるようです。

ワクチンという名前は、19世紀のフランスの細菌学者のパスツールが、18世紀末にイギリスの医学者ジェンナーが天然痘(痘瘡)の予防のために、牛の痘瘡の分泌物を人に接種して、天然痘を防いだことに対して、この免疫療法にワクチンという名前をつけたことに始まります。ちなみにワクチンのワクはラテン語の牛(vacca)という言葉からきたといわれています。このジェンナーの牛痘法は実施から早や9年後に、日本に伝えられ実施されるようになります。現代と違って不便な時代にいかにすばやく治療法が伝わったことに驚きます。わが国でも天平時代(8世紀)から天然痘は流行したらしく、多くのひとが苦しんでいたと考えられます。優れた治療法にすぐに応じたのだと思います。今日では世界中から天然痘は撲滅されたといわれています。

ワクチンを含めた免疫療法は、抗原となる病原体や物質に対してそれを中和して病毒性を低下させる治療法ですが、その抗原性が途中で変化したり、体内のどこかに潜んでしまうと、なかなか有効な抗体を作りだすわけにはいきません。いずれにせよわれわれは感染予防に注意深く対処しなければなりません。

